

インドの詩人、プリヤンバダ・デーヴィーとの交友に指摘されてきたが、これはもう確信犯だ。

そのニヴェディータは、その1年ほど前に『カーリー女神』に関する著書を刊行したばかりだった。インド女性の社会意識の改革を目指していた彼女は、1905年のベンガル分割令を切っ掛けに高揚したスワデジ（「自らの国」を意味する）運動のなかでも一翼を荷うことになる。近代ヒンディズムの「再興」という「伝統の発明」に関与し、「母なるインド」という形象の確立にも深く関わった。その時期尚早の死ののち、彼女は植民地下インドに国民意識を植え付けた人物として、詩人タゴールらからも称賛され、一部からは神格化までされてきた。その彼女が夢中になって出版を取り計らったのが、ほかならぬ天心の『東洋の理想』だった。

「アジアはひとつ」。巻頭のあの有名な宣言を、この文脈におき直してみよう。ニヴェディータは、ここに「インドはひとつ」という政治目標を読み込んだ。東洋の「希望の国」日本と、「大英帝国に蚕食されるベンガル」という対比はヴィヴェカーナンダの実感でもあった。『東洋の覚醒』も、元来はこれらインドの友人たちとの連帯を誓う、天心の真情を吐露している。その原稿は、「母」なるニヴェディータに当てた天心の「恋文」と言ってよい。

だがその理想は、日露戦争を経過すると、現実に乗れず越えられない。続く『日本の覚醒』（1905）は、欧米列強に対して日本の朝鮮介入の正当性を説く時局プロパガンダだった。日本が帝国列強の仲間入りをした以上、もはや『東洋の覚醒』の出版など、自己矛盾でしかない。ガードナー夫人に宛てられたとあってよい『茶の本』（1906）は、美の世界に沈潜する。そこに漏らされた「日本」を含む「文明国」の「野蛮さ」への告発には、政治的現実への天心晩年の諦念が深く宿されている。

## 連載⑤ インドから見た岡倉天心

明治ナショナリズムの国際的環境と「母」なる形象

天心・岡倉覚三（1862—1913）の最初のインド旅行には、ジョセフィーヌ・マクロード（1858—1919）という婦人が付き添ったことが知られている。平凡社の『天心全集』にもいちおうの注はついている。ところが、たいして期待もせず、当地の図書館の端末で検索をして驚いた。彼女は、インド近代の宗教改革者として知られるヴィヴェカーナンダ（1863—1902）に帰依したことで知られるが、伝記まで何種類か出ている。それによると、ニュー・ヨークの富豪の家に生まれた彼女は、ロマン・ロランをして、『ラーマクリシュナ』、『ヴィヴェカーナンダ』、『ガンジー』ほかのインド4部作を書かせた張本人であり、第2次大戦後にも、ギリシアの作家カザンツァキスを世界の絵舞台に引っ張りだすのに功績があったらしい。ミルチャ・エリヤーデも『回想』で、彼女の手腕に驚いている。生涯人間への好奇心を絶やさず、学ぶことを自らの信仰とした人らしい。その彼女を最大の文通の友としたのが、ニヴェディータである。

ニヴェディータは、天心の『東洋の理想』（1903）に序文を寄せたことで知られる。本名はマーガレット・エリザベス・ノーブル（1867—1911）、北アイルランド出身。今まで未見だった4巻の全集というのを書庫から引き出し、ついでに書簡集（3巻と予告されるが、3巻目は不明）を繰ってみると、どうだろう。天心への言及があちこちにある。マクロード宛書簡では、天心は「犀」と呼ばれ、一行は「山賊とその一味」などと揶揄される。『東洋の理想』の校正で編集者と揉めた記録や、所謂『東洋の覚醒』（天心生前は刊行されず）の執筆に没頭した天心が、疲れると彼女のところに不意に「訪問」した事実なども知れる。Niguと親しげに呼ばれる天心が、ニヴェディータを「すばらしいお母さん」に見立て、自らは「悪い男の子の役を演じた」という記述まである。天心の「甘え」は、ボストンのガードナー夫人や、晩年の

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教授  
稲賀繁美